

SWEET RESERVATION。 SUNSET HILLS HOTEL。 (人生観としてのSWEET RESERVATION)

金沢区 ^{まつ}松 ^せ瀬 ^{がく}学



この場合の reservation は予約ではなく人生の中であえて、確定させなかったもの。人は生きていく中でやらなかった選択、言わなかった言葉、進まなかった別の人生、深く踏み込まなかった関係を無数に抱える

それらは失敗でも後悔でもなくて、人生の奥にそっと取っておいた余白。それが Reservation 留保。何故？ Sweet 甘いのか？ 年を重ねて回想する地点に立った時、全てをやり切っていたら人生は重すぎた。全てを決めてしまっていたら物語は閉じていた。そう気づく瞬間がある。痛みではなく、ほのかな甘さとして残る。それが SWEET RESERVATION

アルバム SUNSET HILLS HOTEL に収録されてる一曲。それが SWEET RESERVATION 鈴木茂プロデュース作品の一部で、歌詞があるポップスと言うよりインストゥルメンタル主体のアルバムだ。アルバム全体は、旅、夕暮れ、内省的な時間と言ったテーマを背景に音楽的な回想・情緒空間の演出が特徴。回想録的イメージとしての情景、SUNSET HILLS 夕暮れの丘もう泊まる事はないホテル、名前だけ残ってる予約台帳。実際には使われなかった部屋、自分の人生に確かに用意されていた部屋が存在する泊まらなかったからこそ、永遠に美しい部屋。この曲は歌詞のある通常のポップ・ソングではなく、楽器・音響で情緒を描くタイプである。情緒だけが残る事で聴く側の過去の記憶、深い感情を自由に投影できる様になっているのだ。

言葉が説明せず余白を聴き手に預ける。人生の回想で埋めきれない余韻を象徴しているのだ。Sweet (甘い心地よい余韻) Reservation (留保・取り置かれた可能性) この二語には、全てを言い切らない、決めない、時間を飾らない！と言うニュアンスがあります。人生の中で忘れられない瞬間、やらなかった選択、いつか戻りたい薄明の時間を確定させずに、やわらかく心の奥に留めておく感じを表現。アルバム作品全体で SUNSET HILLS HOTEL (夕暮れの丘のホテル) という場所的・時間的空間を描く作品である。SWEET RESERVATIONは夕暮れの部屋の窓辺で自分の人生の断片を静かに見返す様な“余韻の予約席”なのです。

人生観として感じられる事は、“ただそこにいた自分”と言う存在。完結せぬ体験を永遠の余韻として抱える事自体が美しいと言う感覚を、この曲は呼び覚ます。では何故？回想録的＝人生を振り返る音楽に聴こえるのか？最も大きい要因はテンポと拍感。前に進まない時間。ミディアム～スロー。明確なドライブ感がないビートが引っ張らない。未来へ向かう音楽ではなく、立ち止まり、思い返すための時間。人生の回想と言うのは、出来事が一直線に進む感覚ではなく思い出が浮かんで消え、また戻ると言う循環構造。この曲のテンポは循環する時間を再現。解決しない和声、終止(カデンツ)を曖昧にする。終止しない＝結論を出さない。意味を確定させない。それが Reservation 留保。人生において成功、失敗、正解、間違いを断定しない地点、そこに立った人間の和声感覚だ。メロディは大きく跳躍しない。歌い上げない。途中で淀む様なフレーズ。これは主張ではなく内側でつぶやいている、語られない独白です。この曲は言い切る前に少し微笑んで黙るのだ。これが回想録感を強く生む。重要なのが音色。エレピやシンセの柔らかいアタック。ギターのとーンが前に出すぎない。リバーブ(残響)が深すぎないが確実にある。これは現在の自分と過去の出来事の距離を音で表現。近すぎる記憶

は痛みになる。遠すぎる記憶は無意味になる。丁度、甘く振り返れる距離に音像を置いてる。距離のある記憶、それが Sweet なのである。通常のポップスは A → B → サビ → クライマックスと言う人生の成功譚の構造を持ちます。この曲は大きな山を作らない(山がない人生)クライマックスが曖昧。終わり方も静かです。つまりドラマにならなかった人生の尊重です。目立たなかった日々、誰にも語らなかった時間成果にならなかった努力。それらを否定せずに音楽として成立させる構造。人生で確定させなかったものを音楽的にも解決させず、だが心地よく保持してる(タイトルとの一致)振り返る地点に立った人のための音楽だ。音楽そのものがそう設計されている。

アルバム全体がホテルという比喻で何を表現しているのか。何故？SUNSET HILLS HOTELなのか？ホテルとは何か？人生観として見るとホテルとは特殊な場所。住まない、所有しない一時的に身を預ける。名前も肩書も脱いで滞在する。ホテルとは人生そのものではなく、人生の途中に現れる中間領域。家＝決定された人生旅先＝未知の未来。その間にあるのがホテル。SUNSET (夕暮れ)は昼でも夜でもなく始まりでも終わりでもない。人生の総括が始まるが、いまだ幕は下りていない時間である。つまり、SUNSET HILLS HOTELとは、人生の後半に差しかかった人が、一度立ち止まり自分の過去と未来を同時に眺めるための場所。予約台帳としての人生。ホテルには必ず予約台帳がある。そこには泊まった人、泊まらなかった人、キャンセルされた部屋が全て残る。これは人生と同じだ。実際に生きた人生、生きなかった可能性途中で手放した未来。どれも消えない！使われなかつただけ！SWEET RESERVATIONとは人生の予約台帳を閉じる前に、確かに用意されていたのだなと微笑む行為だと言える。何故？80年代の日本音楽だけが余白を描けたのか？重要な点だ。社会的背景として80年代日本は経済的に右肩上がり未来が約束されていた。

結果を急がなくてよかった。未来を確定させなくても生きて行けた最後の時代だった。だから音楽も勝利を叫ばない，結論を急がない，成功や破滅に回収されない。途中の感覚が描けた。**日本的感性**との一致。日本には元々，もののあはれ，余情，行間，「図」ではなくて「地」を感じる感覚がある。80年代のシティポップは西洋音楽理論を使いながらも，**日本的な決めない美**を音で実現した最初で最後の時代だった。だから，転調しても感情を断定しない。明るくも勝利にならない。悲しくも絶望にならない。感情を状態として保持する音楽が生まれた。今はもう作れない理由。現代は意味をすぐに求められる。**すぐに評価・数値化**され，音楽も何者かである事を迫られる。reservation する事を許さない時代。だからこそ，この曲が今も人生観として聴ける。それはノスタルジーではなくて，かつて人間が持っていた時間感覚の**記憶**。二つの言葉が描いている事は，成功でも失敗でもなく，完成でも未完成でもなく，**生きた人生を，そっと棚卸しする地点**。回想録的だと感じられたのは，この音楽が体験をモノ（図）として語らず背景（地）として響かせているから。記憶をモノ（図）としてつかむと良い悪いが生まれる。意識の場（地）から眺めると，記憶はただの現象となる。この時，記憶は評価を失い**出来事**となる。記憶自体は中立で，痛みを生んでいたのは記憶でなく再生時の同一化だった。**ただそこにいた自分，ただ在った事を尊重する空間意識！**ヒビキそのモノが自分自身だった。

後記

人生観としての，SWEET RESERVATION！音楽と共に楽しみいただけました？中今とは過去や未来をも含み込んだ現在（**中今の観法**）記憶＝持続とは出来事の**記録**や再生ではない！持続とは中今の事であり中今とは時間の奥行きそのもの。そこがSUNSET HILLS HOTELだ。

